

本日のプログラム

2021年2月24日(水)
 通算第2960回例会
 本年度第27回
WEB例会

- ・開会点鐘
- ・会長挨拶
- ・出席状況
- ・幹事報告
- ・卓話 山口 記由君
 演題…「年男の卓話」

前回例会 記録

- 2021年2月17日 第2959回例会
WEB例会
- ・出席率 WEB視聴 55名中 42名
 出席率 76.36%
 - ・卓話 江坂 正光君
 演題…「年男の卓話」

報告事項

下記の例会は **WEB 例会** とします
 第2961回 3月3日

愛知県立芸術大学でイ・チェリムさんの卒業展がありました。



第2959回例会挨拶 会長 松村晋也君

皆さんこんにちは。本日は瀬戸ロータリークラブ第2959回の例会であります。

さて2月中旬から3月の上旬にかけての季節を俳句の季節にもなっております。三寒四温といいます。寒い日が3日続いた後、暖かい日が4日続き、その後また寒い日が3日続き、1日、1日春本番に向かっていくわけです。今はコロナで行けませんが、錦の1杯飲み屋さんに短冊が掛けてあり、そこに「三寒の別れ 四温の出会いかな」という俳句がありました。なんとなく気持ちちはわかるのですが、真意はなにかなと思っていましたら、中日新聞の古いコラムを見つけました。春3月旧友たちとの別れに涙した子供たちも、4月になるとまた新しい友達との出会いに胸を踊らせる。このように別れと出会いを繰り返すうちに人生も寒さより暖かさに余分に1つ出えるのだと構えていけばいいのだというコラムでした。なんと温かい心の平衡だろ

うと感心し、それからはこの三寒四温という言葉が好きになりました。

ロータリーは3月にはPETSがあります。次年度会長は緊張感の感ずる頃であり、現会長はそろそろ卒業が近くなると実感できる季節であります。三と四と言え、中国の古い寓話に朝三暮四という言葉があります。これは狙公が飼っていた猿に「枥の実を朝は3つ、夕方に4つ与えると言ったら、猿は少ないと怒った。それでは朝に4つ、夕方に3つにしよう」と言っていると猿は大いに喜んだ」という話です。これは全体的に見て変わらぬことなのに、目先の事に拘ってあれこれいう人の事。又は目先を変えてごまかす人のことを言うそうです。私もロータリーの残りの任期「朝三暮四」と言われぬように誠実に執行しなければと心しております。本日は季節がら三寒四温の話をしました。会長挨拶とさせていただきます。

江坂 正光君 「年男の卓話」



1. 牛の妖怪

いきなりですが、丑年にちなんで、牛の妖怪を二つ紹介したいと思います。

(1) 一つ目は、「牛鬼」



西日本の海岸に出てくる恐ろしい妖怪。

相当、凶暴な奴で、古くは、枕草子にもその名前が出てきます（名おそろしきもの）。水木しげるさんが描くとこんな感じですが、なぜ、蜘蛛の体に牛の顔が、乗っかっているのか、すみません。どうにも、わかりません。



鳥山石燕さんが描いたのが、こんな感じです。

なお、申し訳ないですが、両方とも著作権についてはチェックしてません（以下の画像も同様です）。

(2) 二つ目は、「件（くだん）」

学生の頃、ちょっとした疑問がありました。

「事件」とか「案件」の「件」の字は、どうして人偏に「牛」なのか？？？ 広辞苑で「件」を調べてみると、「件」とは、「くだり」「くだん」として、「文書における

記述の一部。」「前にあげた事柄」「いつものこと、例のこと」等々。文書の末尾に、「件の如し」とすると、「前記のとおりである」という意味です。

そんな頃、たまたま古本屋（昔、瀬戸の朝日町にありましたね）で仕入れた小松左京さんの短編集に「くだんのはは」というちょっと怖い物語があり、ここに「くだん」という不思議な生き物が登場します。顔が牛で体が人間の女の子。この時に、初めて、「件」という「怪しいもの」がいることを知りました。

普段使っている漢字が、実は、妖怪の名前であるのだと知り、えらく感動した覚えがありました。ちなみに、「くだんのはは」という題名は、二葉百合子さんの「九段の母」の洒落ですよ。もっとも、「件」は顔が人間で体が牛というのが、正統な「件」らしいです。なので、小松左京さんの「牛女」というらしいです。



正統派「件」は、こんな奴です。

「件」は、牛から生まれて、顔が人間で体が牛。人間の言葉を話し、生まれて数日間の間に、重大なことに関して予言をして、予言をすると死んでしまいます。その予言は間違いなく現実のものとなるとされています。「件」の絵姿は厄除招福の護符になるとも言われています。

牛女は人間から生まれるし、顔が牛で体が人間だし、「件」とは厳に区別すべしなんて言っている人もいますが、まあ、どちらでもいいですよ。

江戸時代頃から、証文や誓約書の末尾に、「件の如し」と書いたりしたものが残っています。これは「件」の予言が必ず当たり、予言に間違いがないことから、「件の予言のように間違いなく実行します」という約束の意味なんだ、なんて話もあります。

しかし、「件の如し」という言葉、使い方は、妖怪の「件」が出現した江戸時代よりも、ずっと前から使われています。まあ、酔っ払いの戯言かなど。



この俗説を使って、こんな広告もあります。お尻の薬の広告のようですが、効用を並べて、「件の如し」としてあります。「件の予言のように、間違いありません。良く効きます」って意味でしょうね。まあ、薬事法違反にはならないと思いますけど。こういう、予言をするやつを、予言獣と定義している人達（ご苦労なことです）もいます。「アマビエ」、「アマビコ」なども、この予言獣の仲間になります。



ちなみに、こちらはアマビエです。コロナ禍の中で、疫病退散にご利益があるということで、有名になりました。



さらに、ちなみに、これはアマビコです。このアマビコがなまって、アマビエになったとか。

2. 丑年の性格など

さて、丑年です。

ネットからのパクリですが、丑年生まれの性格としては、

- ① 努力家でマイペース（努力家は認めますけど…）、
- ② 頑固で意地っ張り（妻は「その通りだよ」と言っています）、
- ③ 大器晩成だとか（「晩」って、いつ来ますか？）、
- ④ 我慢強く粘り強い人が多いが、我慢の限界に達すると突然怒りだし、全て出し尽くすまで止まらない（そうかなあ??）。

3. ということで……、

めったに怒らないはず丑年の弁護士が、仕事上で、怒ったお話です。

(1) ある事件

ストーカー規制法の制定前の時のお話です。この頃は、男女関係の問題に警察は介入に消極的でした。相談を受けても、具体的な被害（ケガなど）が発生していないと、なかなか動けない。しつこく面談を求めたり、家の前をうろついていても、なかなか対処できませんでした。特に、（元）夫婦、（元）交際相手などの場合には、もともと、手が出しにくいものです。被害者であった人が翻意して協力してくれないと、警察は梯子を外された形になってしまいます。

(2) 登場人物

知り合いの警察官からある女性の相談に乗ってやって欲しいと連絡がありました。相談者（依頼者）は、60歳くらいで、物静かな、きっと何十年も前は、、、という感じでした。片足が不自由な方でした。相手方の男性は20くらい年上の80代の人で、空手の黒帯とかいう話でした。

両方とも当時は独身で暫く交際していたのですが、別れ話のもつれからややこしいことになっていました。女性から別れ話を切り出したのですが、男性は承知せず、毎日のように電話をかけてきて怒鳴って脅すし、自宅の周り、職場の周りをウロウロしている。職場や自宅の前の道路に車を止めて、何時間も張っているという感じでした。

ちなみに、私は当時30代半ばでした。依頼者の女性は母親と同年代です。

(3) 初動と訴訟提起

まず、内容証明郵便で、警告しました。

簡単に言うと、「きっぱり、別れます。」「なので、つきまとわないで。連絡もしないで。」「しつこいと、慰謝料請求します。」「何か、言いたいことがあれば、私までどうぞ。本人はダメよ。」という感じのやつを郵送して、届いたけれども反応なしで、相変わらず、やっつけることには変化なし。で、私からの電話は何度しても応答せず。

仕方がないので、訴訟提起することにしました。請求内容は、①自宅の玄関から半径300メートル以内に立ち入るな、②本人へ連絡をするな、面談を求めるな、③職場を辞めざるを得なくなった、怖い目に遭い、心が痛んだので慰謝料を100万円支払え、という感じでした。依頼者は友人のところへ避難してもらい、一部の人しか居場所は分からない状態で、訴訟提起しました。勿論、改めて、警察には相談に行ってもらっています。

(4) 元気で格気……

第1回の口頭弁論期日には相手方も出席しました。請求棄却を求めるものの、事実関係は認めるような、認めないような、、、やっていることは、大体認めているけ

れども、彼女も望んでいることだから、恋人同士の痴話喧嘩に過ぎない、、、というような感じです。

第1回の期日が終わってから、相手方から事務所に電話がかかってくるようになりました。

一番最初は、さあ、「これから事務所の忘年会で、ちゃんこ鍋だ!!」というところへ電話がかかってくる、「お前、俺の女と、できてるだろう!」、「わかってんだぞ」と、おっしゃいました。

「なにを言っとるんだ、この色ボケジジイ!」とは、言いませんでした。「できてませんよ。●●さんにも、私にも失礼ですよ。」と冷静に対応しましたが、こちらの話には聞く耳を持ちません。ああだこうだ言い合った末、忘年会には遅刻して、グツグツに煮込まれた鍋らしきものをいただきました。

その後、怒って、何度も電話がありました。「今、一緒にいるだろう!」、「一緒に住んでるのはわかってるぞ。」などなど、、、

(5) そして、尋問

以下、相手の男性を「**恪気さん**」、私を「**牛さん**」といいます。恪気さんは、牛さんの質問には、まともに答えません。憮然として、裁判官の方を見ているだけです。しかし、黙っていたのが、ある質問に対して、突然、、、

恪気さん 「裁判長、こいつらできてます!」

牛さん 「あんた、質問の意味、分かんのか?」

※今までの腐った電話のやり取りもあり、頭の中が煮込みすぎたちゃんこ鍋のようにグツグツしてきて、つつい、「あんた」と、、、

恪気さん 「やったるぞ、てめえ、この野郎!」

牛さん 「どういう●●●。もういっぺん●●●●●●、●●●●。」

※「●」は、クイズです。中学生のケンカ並みになってきました。

恪気さん 「やったるちゅうのは、やったるってことだわ、馬鹿野郎!」

と言って証言席で立ち上がる。

牛さん 原告席から回って、立ちあがっている恪気さんの方へ、歩きかける。

裁判官 立ち上がって「代理人、代理人」と、牛さんに呼びかける。

・・・と、ここで、法廷にベルが鳴る・・・

私が、携帯電話の電源を切り忘れていたので、法廷でビリビリ鳴りました。

丁度、その頃、ある人が夜のお店の女性に見事にハマっていて、毎日、連絡があり、毎晩、呼び出されて話に付き合わされていました。

「俺は、もう家を出る覚悟がある!」なんて言うのを、

「アホか、バカなこと止めとけ」と、毎日、なだめていました。

慌てて、携帯を止めようとして見てみると、その人からの電話でした。

それを見て、一気に気が抜けて、冷静になりました。

こちらも、あちらも、男つてのは、本当に、、、

裁判官に、「失礼しました」と謝罪して、質問を続け、尋問を終わりました。

裁判の後に、その電話の人に連絡して「ありがとう」と、お礼を言うておきました。電話のお陰で、変なことにならずに済みましたから。

(5) 結末

その後、勝訴判決が言い渡されました。慰謝料は、だいぶ減額されていましたが、元々、請求するつもりはありませんでしたから、問題ありません。

判決の確定後、警察に判決書をもって行って、再度、相談をしておきました。こういう判決が出ていると、警察も動きやすくなります。

警察が、注意のために、恪気さん呼び出すと、この件が相手方の家族に知れ、最後は一緒に警察に来た娘さんが相手方本人に、「お父さん、恥ずかしいこと止めて。こんなことで捕まったりしたら」と、涙ながらに訴えたそうです。それで、もう、恪気さんは、行動を改めました。これにて、一件落着です。

かくも男女の関係は、怪しく、危ういこと、「件の如し」。

おあとがよろしいようで。ありがとうございました。

